

# 第二回「古文書で読む秋田のくらし」

●「岡本元朝日記」二十六〔混梁七三八〇二六〕宝永元年（一七〇四）五月六日

## 【原文】

○五月廿九日未下刻秋田地震多々形勢  
と午刻と未着五月廿四日地震久保田  
士町江之別余代又存教六軒  
余焼失、潰蔵五拾軒余、△蔵六拾軒  
軒焼失、△潰蔵五拾軒余、△米四千五百石余  
軒焼失、△潰蔵五拾軒余、△蔵六拾軒  
△米四千五百石余、△死馬式足程  
△寺六軒焼失、△潰寺五軒程、△御材木  
場江火移り帆柱・小羽焼失、△御米蔵壹  
軒潰候由也、△久保田町家壹軒潰候由、  
△同町土蔵壁過半破損有之候、何も  
追て委調可申上由、

## 【解説文】

○去月廿九日未ノ下刻秋田出足ノ御飛脚  
今午刻参着、去月廿四日地震久保田  
士町弥無別条候、野代ハ又候家数六百軒  
余焼失、△潰家式百軒余、△蔵六拾軒  
程焼失、△潰蔵五拾軒余、△米四千五百石余  
焼失、△大豆百石余焼失、△小豆式百石余  
焼失、△死人男女五十人余、△死馬式足程、  
△寺六軒焼失、△潰寺五軒程、△御材木  
場江火移り帆柱・小羽焼失、△御米蔵壹  
軒潰候由也、△久保田町家壹軒潰候由、  
△同町土蔵壁過半破損有之候、何も  
追て委調可申上由、

【原文】

寛政四年子七月於御会所  
御張出を以被仰渡左之通

一 於御堀魚を釣候儀、以前より堅く御  
停止之處、近来網等までも入置、魚を取り、  
又者礫を打、或ハ御堀江も入候而洗物等致  
候段相聞得、畢竟下々致業可有之、  
御堀端町内之者も右体見当候ハハ、  
可被遂吟味候

【解説文】

寛政四年子七月於御会所  
御張出を以被仰渡左之通

一 於御堀魚を釣候儀者以前より堅く御  
停止之處、近来網等までも入置、魚を取り、  
又者礫を打、或ハ御堀江も入候而洗物等致  
候段相聞得、畢竟下々致業可有之、  
御堀端町内之者も右体見当候ハハ、  
可被遂吟味候

一 夜中下々江相集り、角力等取候模様而、  
甚騒々敷相聞得候

一 夜中所々江相集り、角力等取候模様而、  
甚騒々敷相聞得候

一 内町夜中笛・太鼓等而騒立、往来  
致候者有之様相聞得候

一 内町夜中笛・太鼓等而騒立、往来  
致候者有之様相聞得候

【原文】

寛政元年酉三月十三日於御會  
所御張出左之通

一長刀壹振

但銘有鞘黒塗、身長壹尺  
三寸位、柄長六尺六寸余

鑿鉄

右長刀、当十九日夜中、多賀  
谷下総門前にて、福原彦太郎  
下人拾ひ取候段及訴候、若

失ひ候者於有之者、可被  
返下候間、当廿五日まで御  
用処江可申出候

渡処左之通

一町觸 壹通

一家來觸 壹通

三月

右長刀主無之と相見得、申出無之、付  
同年四月八日御引上、被仰渡、御會所江被  
下ヶ置候

【解説文】

寛政元年酉三月十三日、於御會  
所御張出左之通

一長刀 壹振

但、銘有、鞘黒塗、身長壹尺  
三寸位、柄長六尺六寸余

鑿鉄

右長刀、当十九日夜中、多賀  
谷下総門前にて、福原彦太郎  
下人拾ひ取候段及訴候、若

失ひ候者於有之者、可被  
返下候間、当廿五日まで御  
用処江可申出候

渡処左之通

一町觸 壹通

一家來觸 壹通

三月

右長刀主無之と相見得、申出無之、付  
同年四月八日御引上、被仰渡、御會所江被  
下ヶ置候